

横関 至著

## 『農民運動指導者の戦中・戦後——杉山元治郎・平野力三と労農派』

評者：山本 公德

本書は、一貫して農民運動史研究に取り組んできた横関至氏による、二冊目の単著である。前著『近代農民運動と政党政治』（御茶の水書房、1999年）では、農民運動史研究が個別の小作争議分析のみを対象とする傾向が強まっていることへの批判もあって、農民運動と政治との関わりに焦点が当てられていたが、その姿勢は本書でも貫かれている。

そのような大きな問題関心の一貫性を確認したうえで、本書独自の特徴としてあげられている二つの点について触れておきたい。一つは、前著では農民運動の先進地であった1920年代の香川県を対象に、在地の農民運動指導者に焦点が当てられていたのに対し、本書では農民運動の全国組織の指導者に焦点が当てられているという点である。この点はおそらく、農民運動の「戦中」を分析するのに有効な視角を模索する中で浮かび上がってきたのではないかと思われる。1930年代に入ると農民運動は政治との関わりを深めることになるが、そのことを念頭に置きつつ横関氏は、「運動が組織的になり、地域的広がりを見せ、とりわけ全国的な運動と関わって展開されるようになると、全国組織の指導者がどのような人物であるのかは決定的な意味をもつ」（3頁）と指摘している。

具体的に農民運動指導者として、それぞれ一章分を当てて検討されているのが、杉山元治郎（第六章「杉山元治郎の公職追放—「農民の父」杉山元治郎の戦中・戦後—」）、三宅正一（第七章「三宅正一の戦中・戦後」）、平野力三（第八章「平野力三の戦中・戦後—農民運動「右派」指導者の軌跡—」）の三人である。この三人は、戦前・戦中・戦後を通じ農民運動に大きな影響を与えた人々であるが、横関氏によれば、それぞれに対する評価は必ずしも実像を正しくとらえたものとはなっていないという。そうした乖離を、史実に即して実態を解明することによって解消し、農民運動史研究に一石を投げようというのが、本書の意図であるといえよう。

本書の特徴として挙げられる第二の点は、第一の点とも関わるが、戦前・戦中・戦後を通じた近代日本の農民運動の全体像を、特に連続・断絶の問題に留意しながらとらえ直そうとしている点である。この課題に関わって横関氏が特に注目しているのが、1937年の日中戦争勃発から敗戦までの「戦中」の分析の必要性である。この時期は、戦争とどう向き合うかをめぐって社会運動が大きく変動した時期であり、連続と断絶の問題を考える際には要に位置する時期であるが、「ところが、運動指導者にとって触れられたくない時期であり、自伝や回想記、追想記の類いにおいても言及されることが少なかった」（6～7頁）という。本書は、新しく発見された史料を駆使しながら、この点に切り込もうとしているのである。

加えて、農民運動の全体像をとらえるために本書が重視しているのが、労農派の動向である。例えば1946年の総選挙において、社会党が92議席を獲得したのに対して共産党は5議席と大きな差がついたが、その理由の一つは、横関氏によれば農村票の動向にあった（203頁）。その意味で、戦後も視野に入れた農民運動像を描

くには、労農派系の知識人・活動家の動向を知ることが重要となるのである。だが先行研究においては、共産党系の活動家の分析には一定の蓄積があるが、「戦後の社会党で活動した労働運動・農民運動の指導者達が戦時下においてどのような思想を有し、いかなる行動をとっていたのかという事柄についての検討は極めて立ち後れている」（82頁）という。本書は、この間隙を埋めることで、戦後政治史に対しても一定の再評価を試みようとしているのである。

この第二の特徴に関する議論は、第一部「農民運動全国指導部の動静」で展開されている。この第一部の各章の表題は、第一章「労農派と戦前・戦後農民運動」、第二章「全農全会派の解体—総本部復帰運動と共産党多数派結成」、第三章「大日本農民組合の結成と社会大衆党—農民運動指導者の戦時下の動静—」、第四章「旧全農全会派指導者の戦中・戦後」、第五章「日本農民組合の再建と社会党・共産党」となっている。

では上記のような問題関心を持つ本書が、どのような成果をあげ、どのような問題点をもっているかという点を検討していこう。

まず指摘しておくべきは、本書によって成し遂げられた多くの実証面での成果であろう。とりわけ第六章において、杉山元治郎の戦後における公職追放の時期を確定したことの意義は大きいと思われる。本書で紹介されているように、先行研究では、杉山の追放時期について三つの説が唱えられていた。1946年4月の総選挙以前とする説、1947年5月とする説、1948年5月10日とする説の三つである。これに対して本書によって確定された日付がいつであるかについては、是非実際に本書を手にとって確かめていただきたいが、横関氏は大阪人権博物館に所蔵されていた日記・手帳などを丹念に調べ上

げ、錯綜していた研究状況に決着をつけたのである。

他方で、本書全体の課題・大きな問題関心の解明にどこまで迫ることができているかという点については、問題も少なくない。

第一に、本書が目した三人の農民運動指導者の分析が、いかなる意味で近代農民運動像の刷新をもたらしたのかがはっきりしないという問題があげられる。これは運動体をその指導者に即して検討するという方法論の是非にも関わる問題である。

例えば杉山元治郎を分析した第六章において、公職追放日時を確定した後に取り組まれているのは、杉山が1949年に書いた「覚書該当指定の特免申請書」である。これは、公職追放を受けた杉山が、その解除願いのために作成した書類である（217頁）。横関氏がこの書類を問題視するのは、その中のいくつかの記述が必ずしも事実と合致していないからである。例えば「時には非戦論を唱えて一般社会より迫害を受け、亦軍事予算に反対して右翼団体より脅迫をうけたことも一再ではないのであります」といった記述（229頁）や、「大東亜戦争中に政党が無くなり議員であったものは皆な大政翼賛会、翼賛政治会、大日本政治会等に所属することになったので、私も単なる単なる会員として所属致しましたが、別段重要な役割を致して居りません」といった記述（231頁）がそれにあたるという。

横関氏によれば、杉山は推薦候補として当選した1942年の翼賛選挙において、「東条内閣は大東亜戦争遂行のために生まれ、戦争目的の完遂を第一義として居るので、我々は飽くまで之を支持し、以て大東亜戦争の理想達成に協力せんとするものであります」という政見を述べている（237頁）。しかし「特免申請書」はこの事実に触れられておらず、しかも杉山は自伝に

において「特免申請書」の提出を否定していたという。したがって「公職追放の解除を求めた杉山の弁明は、肝心の問題を伏せたまま追放解除の弁明を行い、自己の戦時下の言動に政治責任を認めようとししないもの」であって、「総括なき転身」であるというのが、横関氏の結論である(253頁)。

しかしながら率直に言って、これは杉山元治郎の戦争責任の再検討であって、杉山の言動の分析を通じた農民運動の再検討ではないように思われる。農民運動分析の一環として杉山という指導者の言動を取り上げる場合の課題は、なぜ戦争を支持していた杉山が農民運動の指導者であり続けることができたのか、杉山が戦時下に提起していた農業政策と戦争支持との間にはどういった関連があるのかなどの問題であろう。本格的な解明は今後のことだとしても、本書においてその糸口は示されるべきではなかったかと思われる。

第二に、本書においては「戦前日本の社会運動と戦後政治との関わりを明らかにする」(11頁)という問題意識が随所で述べられており、またタイトルに「戦中・戦後」という文言が使われていることから分かるように、連続・断絶の問題が強く意識されているが、その場合の「戦後」の射程がやや短いのではないかという点が気にかかった。

本書は連続と断絶のどちらかに引きつけて戦前・戦中・戦後の関係をとらえようとしているというよりも、両方の要素に注意を払いつつ全体像をとらえようとしているように思われるのだが、その際に、連続面を担う存在として注目されているのが、労農派である。横関氏は、労

農派の人々が戦前から一貫して農民運動の統一を希求していたこと、その態度が人民戦線事件で検挙・投獄された後にも貫かれていたことなどに着目しつつ、「農民運動における戦前と戦後の「連続と断絶」を検討するに際しては、組織における人的系譜と指導理念の面での労農派の継続性に注目せざるをえない」(50頁)という評価を下している。そしてこの連続性・一貫性が、戦後にも続く農民運動内での労農派の指導的地位を支え、社会党の支持基盤として戦後政治に大きな影響を及ぼしていったとされているのである。

だが気にかかるのは、労農派が影響を及ぼした「戦後」の事例として取り上げられているのが、日本農民組合の再建、社会党の結党といった敗戦直後の出来事に限定されている点である。これは戦前と戦後の連続・断絶の問題として通例イメージされる「戦後」とは、異なっているように思われる。戦後政治において社会党が革新勢力としての存在感を示していくのは、言うまでもなく安全保障や「戦争と平和」の問題である。そこまで視野に入れた場合に、農民運動を基盤に現実政治への影響力を保持していた労農派は、戦前・戦中・戦後と連続して政治への影響力を保持していた存在ととらえることは可能であろうか。日本農民組合がその後の戦後史の中でたどっていく経緯とあわせて、もう一度考えてみるべき点ではないかと思われる。(横関至著『農民運動指導者の戦中・戦後——杉山元治郎・平野力三と労農派』御茶の水書房、2011年8月刊、401+x頁、定価8,400円+税)(やまもと・こうとく 岐阜大学地域科学部准教授)